

## 「イネスさんの来訪」

2014年10月28日

妻の友人、イネス・シュスターさんが22日（水）から27日（月）まで、我が家に滞在した。二回目の来訪である。20数年前、妻がロンドンに1ヶ月、語学研修に行った時、二人は知り合い、以来変わらぬ友情を深めている。クリスマスやイースターカードの交換も頻繁にしている。彼女は旧東ドイツのケムニッツで育ち、薬剤師をしている熱心なクリスチャンである。共産主義体制下で信仰を守りぬいた誇りを持ち、自由に教会生活ができる現在を喜んでいる。ルター派教会に属しているが、この教派は女性教職を認めていない。しかし、彼女は説教ができる資格を取り、今もギリシャ語、ヘブライ語を学んでいる。カール・バルト、ボンフェッファー、トゥルナイゼンはOK、ブルトマンはNO、フェミニスト神学者のドロテー・ゼレは激しすぎてNOだそうである。聖餐式は教会に混乱をもたらすので、受洗者のみが配餐に与るべきだと主張している。本人も「コンサーバティブ（保守的）」と言っている。メルケル大統領の熱烈な支持者である。礼儀正しく、堅実で、勉強家である。古き良き時代の典型的なドイツ人という印象である。

私たち夫婦も、イネスさん宅に招かれて行ったことがある。綺麗に掃除された家で、汚すのではと、気兼ねしたほどである。彼女の教会に外国人が来たことは初めてで、掲示板に日の丸を書き、大歓迎してくれた。彼女の師であるヴェンデ牧師宅を訪ねた。ヴェンデ牧師は教会史の学者で、旧東ドイツ時代は教会の指導者であった。尾行、盗聴され、エンジンをつかされた車の中で会話したと当時の苦勞を話してくれた。

イネスさんは案内する所を几帳面に調べ、文書を作り丁寧に説明してくれた。マルチン・ルターが修道士の頃、生活した聖アウグスティヌス修道院に行き、ルターが説教した説教壇に立ち、ルターが悩みながら歩いた石畳の庭を歩いた。世界のルター派のクリスチャンが憧れる院内の宿泊所は、何年も待たなければ行けないそうだが、イネスさんの紹介で宿泊できた。ドレスデンのゼンパーオーパーでの、シャルル・デュトワ氏が指揮するコンサートは楽しかった。日本のコンサートは「さあ、演奏してください。私たちは聞きますよ」という固い雰囲気であるが、彼らは音楽を喜び本当に楽しんでいた。指揮者も踊るように指揮していた。

イネスさんはスタディツアーで日本に来たが、それが終わってから我が家に来た。妻は連日、日本人の日常を知ってもらうように色々な所を案内した。彼女は全てに興味津々に見入り、聞き入り、写真を撮り、メモをしていた。旺盛な知識欲には感心した。食事も「美味しい」と堪能していた。

私は「津軽三味線」のライブに同行し、日本民謡を楽しんだ。ドイツに留学した鈴木正三牧師もそれに招き、二人はドイツ語で「天皇制」について熱心に議論していた。また、神奈川労働弁護団などが主催した「集団的自衛権にNO！ 10・26 かながわ大集会」が横浜公園で行われ、彼女も参加してくれた。帰国の前日であったが、パレードに最後まで歩いて、「抗議の声が政府に届くといいですね」と言ってくれた。

妻がロンドンの語学研修に行った時、ブラジル人女性とも知り合った。彼女は、小井沼牧師夫妻が伝道、牧会していた「サンパウロ福音教会」近くのパウリスタ通りのマンションに住んでおり、招かれた経験がある。世界は近いものになったと実感した。

異文化を体験し、互いに理解を深めることは良いことで、政治はギクシャクしていても、唯の人として交わりを持つことは楽しく、平和への小さな一歩となるであろう。